

## シベリア、最後の日本馬

熊本県 南部 吉正

「お前たちは隣りのバグルスキー（搬送）ラーゲル（収容所）に行くことになった。荷物をまとめて、ワーフタ（衛兵所）の前に行くように」。

ブルガジール（班長）が呼び上げた名前の中に私の名もあつた。中国人、日本人、朝鮮人など、ほとんどが東洋系の囚人たちであつた。シベリアの国際ラーゲルに送られて以来、伐採ラーゲル、鉄道建設ラーゲルなどを転々としてきたが、入ソ三年目の冬を迎えて、私の体力は弱りきつていた。班長に呼び出された東洋人たちも、連日の降雪の中の伐採作業に目はくぼみ、足元もおぼつかない状態で、作業ノルマに至っては五〇%を切る有様であつたのだ。新しいラーゲルでどんな作業が待っているのか、少なくとも伐採作業よりは楽であれかし、と祈る気持ちで衛門の前へ急いだの

だつた。

同行十人、その中に中野学校一期後輩の福森栄次がいた。同じ樺太特務機関にいて、五十八条の六項、つまりソ連刑法のスパイ罪で十年のシベリア流刑を宣告された仲間であつた。入隊前は北海道の牧場で働いていたという福森は、夜一人になると、下宿の六畳間で正座して尺八を吹いていた真面目な兵隊であつた。

一行は銃を肩から吊るした看守に追われるようにして、粉雪の舞いしきる白樺林の中の雪道を歩いていった。三時間ほど歩いただろうか、着いた所はシベリア・タイガと呼ばれる密林に囲まれたラーゲルであつた。横長いバラックが三棟、その外に棟の低い厩舎らしい三棟が見えた。

仕事に出払つたバラックの中は森閑としていて、年老いたロシア人らしい庭番が、ペチカの横に掛けていた。彼は空いている二段式ベッドを私たちに示した。それぞれ自らの居場所、これから何カ月、あるいは何年厄介になるか知れない板張りのベッドが決まると、私たちは庭番が掛けているペチカの周りに集まつた。

「ここは、どんな仕事をする所か」と、私は白い顎髭を蓄えている、皺の多い老人に聞いた。「近くの伐採ラーゲルで切り出した材木を、馬糞で駅まで運ぶのさ」

老人は、私たちの顔を見回しながら答えた。「お前たちは中国人か」と、今度は庭番が聞いた。「中国人もいれば朝鮮人、日本人もいる」「そうか、お前たちなら逃げる心配がないからな。この囚人は、刑期が終わわずかな者ばかりなのだ。馬糞を追って、看守の目の届かない距離を往復しなければならぬからだよ」「それで、俺たちも馬糞を追うのだろうか」「多分纒道の掃除ではないのか。このところ雪が降り続けているからな」。

十二月も後半に入っていた。中部シベリア、バム鉄道沿線一带には、十二月に入っずと雪降りが続いていた。三寒四温という気温の変化は感じられたが、そうした温度差に影響されることなく、雪は毎日のように降り積もっていた。それも節ふしにかけたような粉雪であった。粉雪は少しの風にも、レースのカーテンの

ように横降りに流れていった。

私は福森と並んで、二段ベッドの上段に席をとった。纒道の掃除ということになれば、伐採よりは楽だろう、第一掃除にはノルマの付けようもないだろうからと想像したのである。

どこのラーゲルも同じようで、レールの切れ端を叩いてスーブの配給が知らされた。私たちは庭番に教えられて、手製の飯盒を下げて炊事場へ向かった。五〇〇ccのスーブ、白いスーブ汁の中にジャガイモの小さいのが二つ三つ、それにキャベツの葉が浮いている。パンはなかった。スーブをすすり終えた頃に、班長らしい背の高い中年男がバラックに戻ってきた。「今から纒道の掃除だ。準備をして俺に付いて来い」と班長は大きな声で命じた。私たちは慌てて綿入り外套を着込み、防寒長靴をはいて班長の後に従った。

雪は小止みなく降っていた。小山のように材木を積んだ馬糞の馱者が「ヘーイ、ベゴーム！（そーれ、早駆けだ）」と声を上げ、鞭を振りながら私たちの横を

通り抜けていった。すると「いいか、今見たように雪のために馬の足が鈍っている。お前たちは早速橇道の雪を掃き寄せるのだ！」と班長は命じた。しかし掃くといつても、箒も松葉かきもない。道具はないのかと班長に聞くと、その辺の白樺の小枝を折って箒を作るのだと言う。私たちは橇道の横に自生している白樺の木によじ登って小枝を落とし、箒らしいものを作った。「一人当たり二〇〇メートルほどの距離を担当するのだ。馬の小便はすぐに凍るのでかまわぬが、馬糞は凍り付いたら取りにくいのですぐに片付けねばならぬぞ！」。橇道に沿うて、私たちはそれぞれ距離をとって作業を開始した。その間にも馬糞は、軋み音を残して駆け去っていく。

六メートルほどの木材を十数本も積んでいる馬糞の馬は、シベリア馬と呼ばれる小型の黒馬で、短いたてがみを打ち振りながら懸命に橇を曳く。しかし馭者たちは、蒸気機関車のような水蒸気を二つの鼻孔から排出している馬の背に、「ベジャーチ、ブイストロ！（早駆けだ、急げ！）」と、容赦のない鞭を振り下ろ

す。その馬たちの頸には、二、三〇センチほどもあるツララが何本も垂れ下がっていた。用便のために足を停めようとする馬があると、馭者たちはすかさず「ニエ、アスタノビーチ！（止まるな！）」と、鞭を振り下ろした。すると馬は、小便も糞もたれ流しながら駆けっていくのだ。

私たちは湯気を立てている馬糞を両手で掬い上げ、橇道の外の雪の壁の上に捨てるのであった。惨めな、そして孤独な作業であった。世界中を探してもこんな仕事はあるまいと思いつながら、私は両手の中で湯気を立てる馬糞を掬い上げては捨てる作業を続けた。やっどひと作業終えても、私たちは箒を持って手を休めることはできなかった。通過する馬糞を眺めてでもいようものなら、すかさず「ニエ、レニツア、メツチイ！（怠けるな、掃くんだ！）」と、馭者たちの罵声が飛んできたからだ。

伐採よりも楽かもしれない、と思つて来た新しい職場であったが、シベリアにはどこも楽な仕事はないと思つた。箒を持つ手が寒さのためしびれてくる。指の

ない大きな手套をはめているが、零下も四〇度近くになると感覚が薄れてくる。防寒長靴の中の足指がうずいてくる。凍傷の前兆なのだ。慌てて足踏みをして血行を良くしなければならなかった。

どんよりと曇ったシベリアの冬の日の日没は早い。

午後三時を回ると、いや、時計がないので正確な時間は分からないが、辺りは霧がかかったようにぼんやり薄闇に包まれてくる。その薄闇を破るように馬櫓の軋み音が聞こえ、馭者の叱り声が響く。「スカレイ、ベゴーム！（急げ、早駆けだ）。馬櫓の数は四十数頭もいただろうか、いや、もっと多いのかもしれない。辺りがすっかり闇に包まれて、最後の馬櫓が通過した後、私たちは手作りの箒を雪の下にしまって、雪明かり頼りにラーゲルに帰るのであった。

ふらつく足を踏みしめながらラーゲルに戻り着き、一杯のスープをすすると、それでもどうやら人間らしい感情が戻ってくる。ロシア人たちはベチカの上で何やら煮炊きしているようだが、私たちには煮炊きする

何もなかった。「奴ら、馬糧のライ麦を煮ているようですよ」と、ベチカの近くに寄って眺めて来た福森が報告する。「豊原の刑務所では、俺たちも使役に出て、馬小屋の敷き藁交換の燕麦を引き出して食ったことがあったよな」「そうでしたよな……」。

空腹を忘れるためには眠るより外はなかった。幸いバラックの中央にデンと座っているベチカは赤々と燃えており、ひまわりの油を入れたケロシン（灯油）は、電灯代わりにわずかにそれらを映し出していた。寒さは感じなかった。私たちはいつの間にか眠っていたようであった。

次の朝、班長が私たちに渡したのは、六〇〇グラムの黒パンであった。私は一度に食うつもりでいたが、福森が半分は昼食に残しましょうと言うので、残して小袋に入れ、腰に吊るして作業に出た。

大男の班長は、私たちの作業を監督するためによく巡回して来た。その日、その班長が私の傍らで足をとめた。「君、日本人か」「そうだ、日本人だ」と私は答えた。「おれはフィンランド人だ。おれはロシアのバ

ルチック艦隊をやっつけたアドミラル・トーゴ（東郷提督）を尊敬している。俺たちもロシアと戦ったことがあるのだ」「そうか、班長はロシア人だと思っていたよ」と私は答えた。それにしても東郷元帥を称える外人がラーゲルにいるとは思わなかった。「俺たち、昭和十四（一九三九）年十一月から昭和十五年の三月までロシアと戦ったが、一歩も引かなかったのだ。俺はその時捕まって刑務所にぶち込まれたのだ、八年の刑期だよ」「そうか、君も勇敢な兵士だったわけだ」「フィンランドにはトーゴというビルがあるぞ。

おれはこの秋刑期満了だが、村へ戻ったらシベリアで日本人と会ったことを話すよ。」

班長が私に会うと、「日本人トーゴ」と呼ぶようになったのはそれからである。その日、作業を終えて夕食のスープをすすっている私のベッドに、班長が「クレーシャイ、ヤポンスキー、トーゴ（食えよ、日本人東郷）」と黒パンを差し出した。黒パンは五〇〇グラムほどもあった。私は福森と等分して、フィンランド人の好意を腹の底に収めたのであった。

その頃から何となく気付いていたが、馬轡を曳く小型の黒いシベリア馬の中に、一頭の栗毛の中型の馬がいることがあった。それは日本産の馬ではないか、と私はひそかに思っていたのだ。

その栗毛の馬が、その日の昼過ぎ、偶然私が掃く雪道の前に止まったのである。年若いロシア人が、何やら叫んで鞭を上げるが、栗毛はびくとも動かない。その栗毛の頸にはよだれが凍り付いてツララとなり、何本も垂れ下がっている。凍り付いた踵ヒソは閉じられており、肋骨のはみ出た胴体からは白い湯気が立ち上っていた。震えている四本の足。

「暫く休ませたらどうだ。疲れているよ」と私は若い馱者に声をかけた。「ノルマがかかっているのだ、休むわけにはいかぬ」と馱者が大声で答え、再び鞭を上げた。「この馬、日本産の馬ではないのか」と私は気に懸かっていたことを馱者に聞いた。「そうらしい、日本の馬は図体ばかり大きくて、からきし力がないのだ」「この痩せようでは、力が出ないのが当たり前だ」「去年までは沢山の日本馬がいたが、これ一頭になっ

てしまった」馭者は鞭を上げるのを諦めて、煙草に火をつけた。「死んでしまったのか」「そうだ、この寒さだからな。その点、シベリア産の馬は小柄だが強いぞ」。

後続の馬橋が来たので、馭者は橋から降りて「さあ出発だ、力を出すのだ」と再び鞭を上げた。馭者と一緒になって、私も材木の横にへばりついて橋を押しした。だが、暫く休んだ橋は雪道に凍り付いたように動かない。栗毛の馬は鞭を浴びて懸命に四肢を踏ん張るのだから、ギーと軋み音を発するだけである。後続の馭者がやってきて、三人力を合わせてやっと栗毛の橋は動き出したのだった。

遠ざかる馬橋が粉雪の彼方に消えるのを眼の奥で捉えながら、私は搬送班ラーゲルで死んでいったという多くの日本馬のことを考えていた。どれほどの馬が関東軍にいたのか、それら数百、いや数千頭に上るのはなかったのか。捕虜となった兵たちとは別仕立ての車両で馬たちは、シベリア各地のコルホーズや伐採ラーゲルに送られたのに違いない。

馬たちにかけられていた日本語が急にロシア語に変わった時、彼ら馬たちは戸惑ったのではないか。それに、この睫さえ凍る寒さと容赦なく打ち振られるロシア人たちの鞭の痛さ。彼らは寒さだけでなく、信じていた人間の無情さに震え上がったのではなかっただろうか。

可愛そうな軍馬たちよ。彼らは三年目にして一頭を残して皆死んでしまったというのだ。その最後の一頭の余命もそう長くはあるまいと私は想像したのである。

その日、日本産の栗毛の馬の姿はなかった。栗毛を追っていた若いロシア人の馭者は、黒のシベリア馬を追っていた。私は箒の手を休めて「日本産の馬はどうした」と馭者に聞いた。

「今日は休ませている。疲れているのだ」「それはよかった。ゆっくりできるだろう」。私は栗毛のことを思いながら、彼らロシア人にも人間らしい情愛はあるようだ、とホッとする気持ちになっていたのだ。

た。

昼になると、ラーゲルの炊事当番が桶に入れたスープを馬糞に積んで運んでくる。私たちは近くの掃除人四、五人が集まって飯盒一杯のスープをもらい、雪の上に腰をすえてそれをすすった。降りしきる粉雪が飯盒の立てる湯気の中に消えていった。

バラックの中に騒動が起きたのは、その日の夜半であった。隣りのベッドの福森が「馭者たちが騒いでいますよ」と私を叩き起こしたのだった。頭を上げてベチカの辺を見ると、十数人のロシア人たちが何か言い争いながら、真っ赤に焼けたベチカの鉄板の上で煮炊きをしているようである。肉の匂いが鼻を突いた。私は下段のベッドの上でスープをすすっている中年のロシア人に聞いてみた。「何を騒いでいるのか」「屍馬が出たのだ。皆で肉を煮ているのさ」「屍馬はどこだ、まだ肉はあるのか」「厩舎の前へ行ってみる、でももう肉は残っていないぞ」「行こう」と、私は福森を誘って綿入り外套を着込んでバラックを飛び出していった。月夜であったが、雪は小止みになっていた。私た

ちはバラックの奥の厩舎を目指して走っていった。

厩舎の前で私たちが見たのは、白骨と化して横たわっている屍馬の姿であった。「食えそうな肉は残っていませんね」と福森がつぶやいた。「内臓までも持っていったんだな」と、私たちはため息をつきながら、横たわる白骨体の前に立ち尽くした。「後脚の間にか黒いものが付いていますよ」と福森が言った。

私は近付いて、その黒い物をのぞいた。「馬のチンポだよ」「食えんとすかね」「さあ、どうだか。ロシア人たちが残しているから食えんとだろうな」「せっかく来たのだから切り取ってみますか」福森は用意していたナイフを綿入り外套のポケットから出し、凍り始めている馬の一物を根元から切り取った。

バラックに戻ると、ベチカの周りにはまだ五、六人のロシア人たちが煮炊きをしていた。福森と私は、ケロシンの明かりを頼りに、三〇センチほどある牡馬の一物を料理することにした。二センチほどの厚さに輪切りするのである。バラックの板張りの上で馬の一物を料理する福森と私を、ベチカの周りのロシア人た

ちが取り囲んで眺めている。「そんなもん、食えるかよ」「堅いばかりで、食べたもんじゃないぞ」ロシア人たちはそれぞれ意見を出し合って眺めているのだ。た。

私は彼らに「煮てみなければわからないさ」と反論した。切り刻んだ馬の一物を飯盒に入れ、バラツクの外の雪を上から乗せてペチカにかけた。調味料などはなかった。煮立つのが待ち遠しかった。腹の虫がググーッと鳴いた。せめて塩があればと思った。

大方のロシア人たちは満腹したのかベッドに入ってしまった、残ったのは福森と私の二人だけになった。消えかかったペチカに薪を継ぎ足すために、私はバラツクの外へ出て薪を運んだ。庭番の老人が眺めていた。ロシア人たちが言ったように、牡馬のチンポコは堅いだけで、味も何も感じられなかった。それでも福森と私は、黒い肉片を口に入れた。ひもじさにはかえられなかったのである。どうやら腹を満たした私と福森が寝についたのは、夜も更けてからであった。

次の朝、私が耳にしたニュースは、胸を締め付け

れるような哀切なものであった。それは、前夜死んだ馬が、唯一残っていた日本産の栗毛だったということである。「昨夜、俺たちが食った屍馬の肉は、日本産の栗毛だったということだよ」と私は福森に告げた。「そうでしたか。むごいことをしましたね」と福森がしんみりと答えた。

私の胸の中を、悔恨の情が走り抜けていった。昨夜、屍馬がいるとロシア人から聞いた時、ひょっとしたら今日は休んでいると言った日本馬ではないか、という思いがふと湧いたが、それは一瞬であり、次の瞬間には、夜目にも白く横たわっている白骨体の前に立っていたのであった。シベリア、最後の日本馬の象徴である一物を俺たちは食ってしまった。何と残酷なことをしてしまったのか……。

「日本産の最後の馬だったんでしょね」と福森が言った。「俺たち取り返しのできない事をしてしまったよ」「罰当たりになるでしょうか」「多分な。馬の祟りがあるかもしれないぞ」

重い足をひきずって、福森と私は掃除班の一行に加

わってラーゲルの衛門を出た。早朝に屍馬の白骨は馭者たちの手で運ばれたのか、衛門の外に横たわっていた。その白骨体に粉雪が降り積もっていた。私は歩きながら、かつての栗毛の白骨体に向かって心の中で掌を合わせた。成仏してくれよ、とは言えなかった。栗毛の魂は、生まれ故郷の日本の農村のどこかにたどり着いたのだろうかと思つた。それとも、このシベリアの雪空のどこかに今もさまよっているだろうか、と想像した。

軍馬として徴用され、重い荷物を運び、敗戦後は酷寒のホルホーズやラーゲルで、それこそ死に至るまで酷使された馬たち。死後は、その肉はもとより内臓まではぎ取り、一物も残さず食い尽くした人間を、馬の魂は決して許してはくれないだろうと思つた。罰せられるのは人間だ、と自らに言い聞かせながら、私は降り積もつた橇道を歩いていった。

四月に入つて、粉雪の舞う日は少なくなつた。代わりにピンポン玉のような綿雪が降つて橇道を蔽つた。

だが、水分を含んだ綿雪は橇の動きを困難にしただけであつた。ブルガジールは橇に樽を積み込み、近くの小川の厚い氷を砕いて水を運び、橇道に撒いたが、効果のあるのは朝夕だけで、昼間の橇は動かなかつた。「明日から材木の積み込み作業だ」とブルガジールが叫んだ。一冬の間、馬橇が運んだ材木が近くの駅（といっても臨時の材木駅）にうす高く積まれているという。それらの材木を貨車に積み込む作業が待っているという。雪が相手の作業から、材木相手の作業になる。これは伐採作業よりも一層危険で重労働ではないかと思ひながら、私と福森は二段ベッドの上で不安な一夜を送つた。

#### 【執筆者の紹介】

出生 大正九年三月一日

住所 熊本県下益城郡城南町吉野

軍歴 昭和十五年一月、朝鮮竜山第七十九連隊

入隊。教導学校を経て陸軍中野学校へ。

昭和十七年三月卒業と同時に、北部軍司

## 強制労働

令部付樺太特務機関勤務

進駐ソ連軍により十年の強制労働を宣告され、ウラジオ経由でイルクーツクへ。

シベリア第二鉄道建設のためタイシエック

ト周辺の国際ラーゲルを転々と移動する

## 帰還

昭和二十八年十二月、病気のため帰国。

肋骨六本を切除

## 職歴

町教育委員三期、地元の会社で社内報の編集、生活相談業務等

## 表彰

熊日文学賞、西日本芸術奨励賞、九州沖繩文学賞、詩と真実賞、平成十二年度県

芸術功労者顕彰

## 全抑協活動

昭和五十六年より熊本県連事務局長、平成十一年より会長

(熊本県 池上 俊邦)

## シベリア抑留の日々

北海道 阿部 吉蔵

(旧姓 佐藤)

## 一、終戦

明日、また八月十五日が来る。何回目の八月十五日だろうか。昭和二十(一九四五)年の八月十五日は樺太の豊原(樺太南部 ユジノサハリンスク)において、俺は部隊の建物の裏で、命令された軍の秘密文書を焼却することに懸命だった。その横にある士官室に二人の上官がいて、立ち話をしていた。「これで日本もお終いだな」という言葉が耳に入ってきた。いわゆる玉音放送のことを言っていたのだった。それを聞いて戦争が終わったとわかり、本当にびっくりした。暫くすると今度は、生き残ったんだ、死ななくていいんだ、生きて故郷(くに)へ帰れるんだという喜びが体中に湧いてきた。ソ連軍はもう五〇度線を突破してどんど